---

■ さろん｜Mail News 2016/4/15｜＃65 ■
(*Bcc でお送りしています)
これまで「さろん」にお申込・ご参加された方にご案内しています。
ご案内不要の方はお手数ですがこのメールにそのままご返信ください。

---

哲学カフェ及び関連イベント情報をお送りします。
みなさんの興味・関心の一助としていただくとともに、
今後とも「さろん」を応援いただければ幸いです。
なお、このメールニュース掲載のコラムは執筆者の個人的な考えを表したものです。
会や専門領域における統一見解や事象を扱っているものではありません。
予めご了承ください。

---

==========Vol.65　2016 年 4 月 15 日（金）==========

さ｜ろ｜ん｜

M｜a｜i｜l｜N｜e｜w｜s｜

http://salon-public.com/
(バックナンバーは HP からご覧いただけます)
https://twitter.com/salontetsugaku

==========

---

【さろん哲学、参加費の設定について】

読者の皆様へ
弊会は、従来、さろん哲学(哲学対話)の参加費を実費ベースとしてきましたが、
この度、会の継続的な運営を考慮し、苦渋の決断でしたが、
300 円/人程度を頂戴することとしました。
何卒みなさまのご理解、ご協力をお願い致します。

開　始　時　期：　2016 年 5 月期開催の「さろん哲学」より
参加費相当額：　300 円/人程度（飲食費別）

さろん
　代表　堀越睦　　拝

---

INDEX

【1】コラム／エッセイ
◇『「疑うことを疑う」ということを考える』
◇『動静両忘の境界、ということ』
【おしらせ】「さろんラボ」アイデアを募集しています
【付録】コトバをハ―バリウムする
編集後記

CONTENTS

【１】コラム／エッセイ
▽【「疑うことを疑う」ということを考える】　聖理
▽【動静両忘の境界、ということ】　セリンジャー

## ▽【「疑うことを疑う」ということを考える】　聖理

藤本隆志氏は述べる*1。「…『がある』と『である』の双方を含んだいみでの『ある』が第一義的な哲学の基本問題になるのはなぜだろうか。それは知覚されるあらゆるものがそれと知覚される形質をもってあり、そうしたものどもの目に見えない裏側ですらものの裏側としてあり、…夢の中の出来事とても夢の中であったのであり、…存在の矛盾概念たる非存在や無ですら、われわれがそれについて（たとえば『無は無である』『無は存在の反対概念である』などと）語るかぎり、そのように言われるものとしてあるからである。ハイデガーによれば、『ある』とは何かを問うて、『ある』とはかくかくしかじかのものごと『である』と答えたとたん、その答えは『である』という述語を用いているために、一種の自己述語に陥った循環定義になってしまっている*2。『ある』はその他のいかなる概念によっても決して定義されない超越概念なのである」。

ウィトゲンシュタインはこのように語る*3。「すべてを疑おうとする者は、疑うところまで行き着くこともできない。…われわれが問いを立て疑いを発するには、ある種の命題が疑いを免れ、いわば問いや疑いを動かす蝶番の役割をしていなければならない」。これを受けて野矢茂樹氏はこう解説する*4。「…探求はその探求を可能にするような枠組みをもっている。そして、その探求を続けるということはその枠組みを黙って呑み込むということだから、探求の活動の中にあってなおその枠組みを疑うことはできない。でも、だからといって探求の枠組みをなしているものが疑いえない絶対確実なものだというわけでもない。われわれはその実践の外へ出て、こんどはいままでの枠組みを疑う新たな実践へと踏み出すこともできるわけだ。もちろん、そのときには別のことがらが枠組みになっているのだけれどね」。

上記の２例を読み、問いが浮かぶ。一般化するなら、「人は、ある行為それ自体を対象に、その行為を実践することが正当にできるのか？」。前者は、『である』という、定義の述語をなす言葉自体を定義しようとすれば循環定義になってしまうことを指摘し、後者は、探求の活動の最中にあってなおその枠組みを疑うことはできないと指摘する。先月の例会では、「疑いえないことがあるのか、あるとすればそれは一体何か」を考えてみた。その対話の中で「なぜ疑うのか？」という問いが出てきたが、それは「疑うことを疑う」ことに他ならない。その問いは、「疑うことを疑うことができる」ことを呑み込むことを意味し、暗黙の裡ではあるが「『疑うことを疑うことはできる』という前提だけは疑っていない」という枠組みを肯定していることに改めて気が付く。やはり「すべてを疑おうとする者は、疑うところまで行き着くこともできない」ということか。

*1) 藤本隆志著：「哲学入門～存在」
*2) ハイデガー著：「形而上学入門」
*3) ウィトゲンシュタイン著：「確実性の問題」
*4) 野矢茂樹著：「論理を行為する」～『小林康夫/船曳建夫編：知の論理』より

---

▽【動静両忘の境界、ということ　（対話の余白から#06）】　　セリンジャー

寂を喜び喧を厭う者は、往々にして人を避け以て静を求む。
意、人無き在らば、便我相を成し、心静に着せば、便ち是れ動根なるを知らず。
如何ぞ、人我一視、動静両忘の境界に到り得んや。――

わかりづらいですよね。それとも読みづらいだけでしょうか。とにかく、いきなり失礼しました。上は「菜根譚」という中国の古典の一節で、物の本によれば、＜前編と後編からなる中国明代末期のものであり、主として前集は人の交わりを説き、後集では自然と閑居の楽しみを説いた書物。別名「処世修養篇」。洪自誠による随筆集。その内容は、通俗的な処世訓を、三教一致の立場から説く思想書＞だそうです。漢文で書かれた原文を日本語に書き下したのが冒頭引用部分です。「書き下し」をするとだいぶ意味がとれる気がしますよね。そして、下記に引用しているような「解説風味の現代語訳（≒超訳）」を施すとさらに意味がくっきりとします。でも、同時にビックリするくらい説教くさく、かつ面倒くさくなってしまってると思いませんか。訳者の感情が乗り過ぎてしまっているというか。たぶんこの辺りに古典を現代的にすることの限界、ひとが苦労して古典（原文）に歩み寄っていくことの創造性が秘められているのかもしれません。

それはそれとして。内容はすこぶる示唆的で、これを読んでなんとなく哲学(的)対話のことが脳裏に浮かびました。もっと正確にいうと、哲学(的)対話がメタファーになって、この一節を理解しているような気がします。
＜静けさを好み、騒々しさを嫌う者は、往々にして人を避けることで、静けさを得ようとする。例えばそれは、人さえ避けられれば、心静かに居られるという環境に依存する自我が動いていることに気が付かないからである。自他一如の本質を体現し、動と静という両極を無くするという脱二元論である悟りの境地（心身一如）には、現実を逃げ出すようなことでは到達できない。つまり、達人は、不安と安心が止揚してしまう大安心の境地を得ようとするなら、現実に目を瞑り、山にこもるような弱者の瞑想などに逃げこまず、忙しい日常の一時でも半眼、時として目をしっかりと見開いて現実の人間と面前対峙する坐禅を行い、「現前する事実」の中に見え隠れする「気付きから本質を発見」して本来の心を取り戻し、「それを教訓」として、更なる「自分の理想像」を心にしっかりと焼付け、「自分を師」として、自分と理想像が一体となるように自分を導きなさいということを言っている＞(*1)。

先月は東日本大震災から５年が経ったということで、そこに流れた時間を振り返ったり、検証する取組みが多く見られましたね。文芸誌も揃って震災５年を特集してましたが、文芸ジャーナリズムでは＜近年、こんなふうに一つのテーマで文学作品が相次いで執筆されるのは、「戦争文学」をおいて他になかった。「震災文学」あるいは「３・１１文学」に作家たちを駆り立てたものは何か＞(*2)という視点で検証が行われていたのが特に印象的でした。直接震災から題材をとった作品を５０冊近く挙げ、そこで問われているものや、震災についての物語の展開と蓄積が層を成してきていることにも目を向けていました(*3)。

記事を読んだりしてアタマの片隅で震災から５年という事実が活性化しているときなど、まったく別のことに目を向けていながら、関心の糸がビビッとつながるようなことが起こりやすくなりませんか。――ウェブジャーナリズムに関するイベント「ジャーナリズム・イノベーション・アワード2016」で、首都大学東京渡邉英徳研究室・沖縄タイムス社・GIS沖縄研究室が共同制作した「沖縄戦デジタルアーカイブ」が最優秀賞を獲得した、というネット記事の中、渡邊研究室のプレゼンの言葉がつよく胸に残りました。＜被爆者、被災者という言葉。特別な人がいるのではなく、我々と同じような普通の人がいきなり戦争体験者という特別な人に変わってしまう。それが戦争であることを表現したくて、このコンテンツを作りました。そして私たちと同じような日常を過ごしていた人にとっての出来事として、沖縄戦を捉えてほしい。それは基地問題や震災の問題につながっていることを感じてもらいたい＞(*4)

震災に関する関心や共感の寄せ方はひとそれぞれですが、被災者や被災地にとってだけでなく同時代に生きる人間だれにとっても重要な出来事である東日本大震災という問題系について、それをイベントの根底に据えて継続してきたてつがくカフェがあります。そういうある特定のテーマについて徹底的に、かつ多面的に、医療やケアという観点についても包括的に取り組んでいる会の蓄積や記録には、この５年間を振り返るときに見落としてはいけない大切な声が刻まれているのではないでしょうか(*5)。国の政策や報道とは異なる、もう一つの声が。そこには＜思想書で答えが出ないことを自分たちの言葉で考えたい、と

いう『渇き』があると思う＞といいます(*6)。このことから、こんなことを想起しました。つまり、読書や学習とは違う、関心を共にする他者との対話を通じて考えたいという思いを抱いたとき、（じぶんの関心ある）特定の主題や歴史的事実に寄り添うタイプの哲学カフェが存在している（あるいは存在していない）ということはじぶんにとってどういう意味を持っているか――ということをです。

そういえば、昨年 10 月に開催された哲学プラクティス連絡会(*7)の会場でも感じたことですが、哲学対話（哲学プラクティス）が一般市民は当然として、保育園児や小中高校生、介護、医療やビジネスの現場まで、非常に多くの領域で実践されていて、多様なあり方が共存しているんだなと学びました。カフェフィロが應典院で哲学カフェをした時(*8)から数えても 16 年。哲学プラクティスがたくさん、いろんな形で営まれていて、そこに歴史性のようなものも感じられます。だからこそ、新興の哲学カフェや哲学対話を扱うプロジェクトのアプローチをとても興味深いと思います。例えば、「探 Q 複数の視点で考えるカフェ」の＜哲学プラクティス，クリティカルシンキング，市民的リサーチ等の実践と研究＞(*9)。あるいは、「哲学カフェ Ante-table/アンティ-テーブル」の＜日常生活という舞台から降りて、『控え室(アンティルーム)』から、演技(=思考・こころ・振る舞い)を振り返る＞(*10)。こうした新規アクティビティの設計思想には、既存哲学カフェの思想やアプローチに対する経験と反省が企図段階から色濃く含まれていることを感じないわけにはいきません。だからこそ、そこに湛えられているいるであろう批判的な精神と可能性の中心がどこにあるのかをじぶんも検証し続けながら、春らしく、次の一手につなげていきたいと考えています。これまた別の“気になる”を見ながら(*11)。

*1）菜根譚 超訳■後集１０５項
http://www.saikontan.net/choyk/2006/03/post_288.html
*2）東日本大震災５年文学／上　作家を駆り立てたもの　「戦争」以来の切実なテーマ
http://mainichi.jp/articles/20160310/dde/014/040/006000c
*3）東日本大震災５年文学／下　作家それぞれの格闘　思索を経て至った境地とは
http://mainichi.jp/articles/20160314/dde/018/040/022000c
*4）全国紙がローカルメディアに敗れた理由　イノベーション＝技術革新という「誤解」
http://bylines.news.yahoo.co.jp/fujisiro/20160314-00055395/
*5）てつがくカフェ「医療とケアを問い直す」
http://ur0.pw/sYkf
*6）日々是好日　「哲学カフェ」人気　他人との対等な対話、仙台から広まる
http://mainichi.jp/articles/20160307/ddm/013/040/052000c
*7）哲学プラクティス連絡会
http://philosophicalpractice.jp/
*8）カフェフィロ/應典院で哲学対話イベント「哲学カフェ」をはじめて試みる
http://www.cafephilo.jp/aboutus/aboutus_enkaku.html
*9）哲学プラクティス，クリティカルシンキング，市民的リサーチ等の実践と研究「探 Q 複数の視点で考えるカフェ」
http://indepriend.hateblo.jp/

*10）哲学カフェ　Ante-table/アンティ-テーブル
http://ante-table.wix.com/ante-table
*11）人工知能が小説執筆 文学賞で選考通過
http://www.huffingtonpost.jp/2016/03/21/ai-novel_n_9519634.html

---

――【おしらせ】――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「さろんラボ」ではみなさんのやる気とアイデアを募集しています♪

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

名称：【さろんラボ】
コーディネーター：【大村】

「さろんラボ」、常設しています。
このさろんラボではみなさんの「やってみたい」を核に、
「さろん」を触媒にして、
どんな化学変化が起きるかを試みる場所です。
さろんラボは当面継続して設けていきます。

この「さろんラボ」からは、さろんの参加者の手で、
【さろんラボ 001】　「あたまの中を散歩するてつがくカフェ」
http://sanpo-tetsugaku.jimdo.com/　が生まれ、
【さろんラボ 002】　「哲学カフェ　Ante-table/アンティ-テーブル」
http://ante-table.wix.com/ante-table　も生まれました。

既存の哲学カフェのカタチに限定せず、
みなさんの中で温まっている関心ごとやご興味を添えて、
どうぞお気軽に下記までご連絡下さい。

みなさんとの新しい化学変化を、スタッフ一同心から楽しみにしています。

▽詳細はこちらまで
salontetsugaku@gmail.com　（担当：大村）

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

---

※メールニュース「イベント号」への掲載依頼を受け付けています※

---

毎月１日発行の「イベント情報号」に一覧形式で掲載している関連イベント情報ですが、
こちらへの掲載依頼を受け付けています。
ご希望の方は原稿をお送りください。

＊
月末25日までに原稿をこちらのアドレスにご送付いただければ、
翌月1日発行予定のメールニュース「関連イベント情報」欄にてご紹介させて頂きます。
どうぞご活用ください。

---

---

---

## ──【付録】

コトバをハ―バリウムする

---

---

本のコトバから　#06

---

「青年の哲学、大人の哲学、老人の哲学は、それぞれ、文学、思想、宗教で代用できるが、子どもの哲学には代用がきかない。子どもの哲学こそが最も哲学らしい哲学である理由がそこにある。」

――永井均『〈子ども〉のための哲学』

---

歌のコトバから　#06

---

「値上げには消極的であるが　年内 値上げもやむを得ぬ
近く値上げもやむを得ぬ　値上げもやむを得ぬ
値上げにふみきろう」

――高田渡『値上げ』（作詞：有馬敲）

---

---

【さろん】イベントカレンダー　http://salon-public.com/　ご予約受付中

---

▽【さろん哲学】哲学カフェ　#68
4/16(土) 15時 - 17時@渋谷　／　テーマ「 なぜ働くのか？ 」

▽【朝さろん】読書会　#59
　5/12(木）7 時 - 8 時@渋谷　／　『沈黙』 遠藤周作（新潮文庫）

▽【さろん哲学】哲学カフェ　#69
　5/21(土）15 時 - 17 時@未定　／　テーマ「（未定）」

▽【朝さろん】読書会　#60
　6/12(日）9 時 - 12 時@渋谷　／　『skmt 坂本龍一とは誰か』 坂本龍一（ちくま文庫）

---

## 編　集　後　記

メールニュース第 65 号をお届けします。

昨夜の地震はたいへんなものでしたね。
みなさまの無事と 1 日も早く普段の生活に戻れるようねがっています。
＊
新年度いかがお過ごしですか。
都心は桜の樹々に若い青葉が目立ってきて、
あの満開の花吹雪がもうずいぶん前のことに思えます。

さろんも 6 年目に入り、いろいろな観点から、さろん哲学で参加のご負担を
お願いすることとしました。
なぜ運営費を設けるのか、それは不可欠なのか、設定金額の妥当性はなにか、など、
およそ半年間ほどをかけて真剣に話し合ってきました。

中長期手に振り返ったとき、この変化が哲学対話のよりよい充実と深い達成のために
少なくない効果となるように、これからも真剣に運営していきます。
ご理解と応援のほど、どうぞよろしくお願いします。

それではまた次号でお会いしましょう。
編集:（フクロウ）

さろん｜Mail News 2016/4/15
　⇒次号（5 月 1 日発行予定）

---

さろん Mail News　第 65 号　／　2016 年 4 月 15 日発行
　編集・発行：さろん

salontetsugaku@gmail.com
http://salon-public.com/
https://twitter.com/salontetsugaku/

---

◇「さろん」にお知らせいただいたお名前・メールアドレスなどの個人情報は、
当会からのご案内のためだけに使用いたします。
また、ご本人の同意なく第三者への提供はいたしません。
◇「Mail News」の無断転載はご遠慮ください。 転載ご希望の場合はご連絡願います。
バックナンバーは HP からご覧いただけます。
◇【さろんツイッター】https://twitter.com/salontetsugaku
◇【さろんパブリック】http://salon-public.com/
「さろん哲学」Web サイト http://salon-public.com/archives/category/023
「朝さろん」 Web サイト http://salon-public.com/archives/category/033
「さろん工房」Web サイト http://salon-public.com/koubou/

"copyright (c) 2011−2016 さろん. All rights reserved."

---